教育長だより　No. 9

２０２３年6月２８日

映 画『 怪 物 』

～ 今日の教育を考えさせられるおススメの作品です。 ～

映画のタイトルから、私は最初「苦手なホラー映画かな？」と不安に思いました。でも、カンヌ国際映画祭で最高の「パルムドール賞」をとった『万引き家族』の是枝裕和さんと、映画『花束みたいな恋をした』の脚本家の坂元裕二さんが一緒に作り、2023 年度カンヌ映画祭で「脚本賞」をとった作品として紹介されていたので、先日、見に行きました。場面展開が次々と変わるので、ちょっとついていくのが難しいですが、ホントに最後までハラハラ・ドキドキの２時間です。なお、この映画の音楽は坂本龍一さんの遺作となりました。

舞台は、諏訪湖の見える田舎町。坂の上の小学校に通う５年生の「湊(みなと)」（母子家庭）と、同じクラスのちょっと変わった勉強のしんどい少年「依里」（父子家庭）、この二人が中心になって、いろんな「事件」が起こります。また、ネット社会の怖さも見えてくる映画です。

まずは、湊と母がベランダから遠くの雑居ビルの火事を見ていました。そのとき、湊は「豚の脳を移植した人間は、人間？豚？」と、変なことを母に聞きます。戸惑う母に、湊はこの話を担任から聞いたと話します。ある夜、湊が帰って来ないので探しに行きます。廃線跡のトンネルの中で、「怪物、だーれだ。」などと言う湊を発見。連れて帰る途中で、湊は車から急に飛び降りてケガを。病院で検査をするも、異常なし。母は、こうした異常な行動を学校の担任のせいだと思い、抗議に向かいます。しかし、学校側の対応はのらりくらり・・・。母の憤懣(ふんまん)は募ります。

場面が飛んで飛んで展開するので、ストーリーをつなげるのがやっとです。ホントの最後に、この二人の少年の友情が見えてくるのですが・・・。彼らはこのトンネルの先にある見捨てられた電車を「秘密基地」として、友情を育みます。

この映画は、つくられた担任の体罰（事実ではないのですが・・・。）と、学校管理職による強引な保護者説明会での謝罪、自死をも覚悟でゆれる担任の先生の心、そんな担任を無責任に追及するマスコミの人権侵害的な取材と記事など、「見どころ」いっぱいです。

また、教職員の間での一人親家庭への偏見も見られます。「事なかれ主義」の学校という設定で、「こんな学校あるんか！」と、見ていてウズウズしてしまいます。でも、「世間」では、そういう見方の人もいるのかなとも・・・。

一方、子どもたちの間では、湊を巻き込もうとする学級での依里への陰湿ないじめと、それを先生に伝えられない取り巻きの子どもたちがいます。「５年生なんやから、一人くらい正義感を持った子がいててもおかしくないのに・・・。」と、イライラしながら画面を見ていました。そんないじめの中で、健気(けなげ)に、そして、たくましくいきる依里、彼に自然体で寄りそう湊の姿が印象的です。

また、依里の父親の虐待も映し出されていました。

大人には見えない子どもの世界、でも、それは「見ようとすれば見えるはずなのに・・・。」と思いながら私は見ていました。

毎日が忙しい最中(さなか)ですが、教育・保育関係者のみなさんにこそ見てほしい映画です。